

歌を投げろ、球のように

登場人物

川上優（かわかみゆたか）……豊春中学校から福島に転校してきた中学三年生。合唱部

川上雅（かわかみただし／雅、兄貴）……優の義理の兄。高校三年生

川上鞠子（かわかみまりこ／母さん）……優と雅の母。さいきん離婚した

岡本有希★（おかもとゆうき／部長、もっちゃん）……合唱部部长。中学三年生

岡本郁実（おかもといくみ／いくちゃん）……有希の妹。中学二年生

岡本洋子★（おかもとようこ／お母さん）……有希と郁実の母

針谷文哉★（はりがいふみや）……優の友人。合唱部

保坂尚志（ほさかなおし／保坂先生、先生）……咽喉科医

村瀬★★……保坂咽喉科クリニックのベテラン看護師

池辺……保坂咽喉科クリニックの新人看護師

石田★……製薬会社の営業

アナウンサーA

アナウンサーB

〈訛りレベル〉☆…ほんのり訛る。抑揚が少ない。★…やや訛る。抑揚を押さえて読む。

ちゃんにアクセント（お兄ちゃん）★★…訛る。助詞などに強いアクセント。★★★……

強く訛る。だべえ、や、濁音が入る。

●ピアノのあるどこか

優 （鞆から楽譜を取り出し、ピアノに近づいて鍵盤を叩く）

（楽譜を見ながら、音取りをする）

（『くちびるに歌を』の歌い出しから20小節ほどまでをアカペラで歌う）

（途中で咳き込み、やめる）

●昼休みの屋上

優 「音階が下がってくる時に声は下がりやすいから、とにかくそこに気をつける。

もう一度やって」

文哉 「いーいーまーやーあーまーにー」
優 「な。にーが下がってる。いーいーまーやーあーまーにー」
文哉 「いーいーまーやーあーまーにー」
優 「そうそう」
文哉 「……優ってさあ、なんで郡山第二に行かなかったの」
優 「あそこ強いよね」
文哉 「強豪校じゃん。いつも全国行ってる。なんでうちなんかに来たの」
優 「こっち来ないほうが良かった？」
文哉 「ああ、いや、違う、ごめん。そうじゃなくて、もったいないから」
優 「もったいない？」
文哉 「歌うまいのにもったいない。だって前は埼玉の豊春（とよはる）にいたんでしょ？」
優 「……あー」
優／文哉 （フェンスの向こうを眺める）
優 「オガチンたち、サッカーやってる」
文哉 （優の示した方をちょっとだけ見る）
優 「……文哉はあれだけど、部長は上手いんじゃない？ うちだって」
文哉 「ああ！ うん！ もっちゃんは上手いよねえ！」
優 「部長も郡山第二に転校すればいいのに、って思うわけ？」
文哉 「……？ あー、いや、ううん」（うつむく）
優／文哉 （間）
優 「……あのね、俺のうち、離婚したでしょ。それで今は親戚の世話になってるから、住むところは。つっても一緒に住んでるわけじゃなくて、なんていうの、手配してもらってる？ 感じ。だから郡山まで通うのはさ、」
文哉 「……」
優 「郡山ってこっから遠いだろ」
文哉 「電車で40分……か、50分くらい」
優 「だろ。電車賃だっただけかかるし、大変じゃん。だから俺は郡山第二には行かない」
文哉 「あ……」
優 「そんな感じ」
文哉 「……ん」
優 「乗換案内で福島って入れるとさあ、アプリのやつね、福島駅より先に郡山駅って出てくんの、なんで？ 福島って県庁所在地なのに、なんなの、存在が薄いの？」

文哉 「あ、あー、あはは。うーんとね、そうそう、けっこうずっと郡山は、県庁を自分のところに寄越せて言ってる。だから仲良くないよ、福島と郡山」

優 「へーえ」

文哉 「人口も多いしね」

優 「郡山？」

文哉 「郡山」

●校舎玄関

優 (靴を履く)

有希 (優を気にしつつ、少し離れた自分の靴箱から靴を取って履く)

優 (玄関を抜ける際に有希に気づくが、そのまま帰ろうとする)

有希 (歩き出した優を追って小走り)

優 (無反応)

有希 「……川上の家って、なんでお兄ちゃんだけ関西弁なの」

優 (有希を振り返って) 「は。なんで岡本が知ってるの？」

有希 「あ、針谷から聞いた」

優 (黙ったまましばらく進む)

「……兄貴は二番目の親父の連れ子で、中学終わるまで奈良のあたりに住んでた。で、離婚して母さんのほうが引き取って、だから兄貴だけ喋り方が違う」

有希 「へええええ」

優 「つっても、いろいろ混ざってるみたいよ、四国とか神戸とか。引っ越し多くて」

有希 「あー、奈良ってなに県？」

優 (歩みを止めず、振り返らず) 「は」

有希 「京都？」

優 (歩みは止めないが、振り返って) 「ばかなの？」

有希 「えー、何県？ ……あ、奈良県？」

優 「そうだよ」

有希 「関西でいいんだよね？」

優 「まあ」

有希 「あれ、琵琶湖があんのは？」

優 「滋賀県だろ」

有希 (目の前に丸を描きながら) 「琵琶湖」

(その左隣りに別の丸を描いて)「京都？」
「……奈良は？」
優 (足早に有希に近づき、京都の丸の右下に新たな丸を描く)
「奈良」
有希 「ああ」
「大阪はどこ？」
優 (有希から離れ)「もういいだろ。どうせ覚えなないし」
有希 (にやにやしなながら)「川上だってこのへんの地理知らないでしょ」
優 (すぐに振り返って目の前に丸を描く)「福島」
(その真上から左回りに真下にくるまで、五つの丸を描きながら)
「宮城、山形、新潟、群馬、茨城」
有希 「おお、すごい。合ってる」
優 (黙っている)
有希 「……？」
優 「ばーか。群馬と茨城の間が一個抜けてるんだよ」
有希 「え？」
優 「やっぱばかじゃん」
有希 「え、なに？」
優 「俺こっちだから。じゃ」
有希 (歩いて行く優をしばらく見守ってから)「川上一！！」
優 (めんどくさそうに振り返って)「……なに」
有希 「明日も部活来るよね？」
優 「行かない。喉の先生のところに行くから」

●クリニック診察室と、アコーディオンカーテンで仕切られた備品スペース

保坂 (診察室のデスクに着席してカルテに書き込みをしている)
村瀬／池辺 (立って備品のガラス容器などを拭いている)
石田 (出されたお茶を飲みながら、備品棚を眺めている)

村瀬 「……で、給料も言い値でしょ」
池辺 「そうそう自己申告」
村瀬 「自己申告。(ん)だから、俺は毎月 200 万稼いでたって言えばそれだけもらえ

るの」

池辺 「そうそうそうそう」

石田 「で、あの一、まだ仮設に通ってて、そうするとまだ」

村瀬 「もらえるから」

石田 「もらえるから、なんか、仮設に行くと、……駐車場が外車ばかり」

池辺 「そう！」

石田 「なんか、ね、えっへへ、あれ！？ みたいなの」

池辺 「そうそう、そうなのそうなの」

石田 「で、噂だと、全国のレクサスの売上ナンバーワンが、いわき」

池辺 「えー！」

村瀬 「漁師できないで可哀想だけど、正直、まいにち寿司食べてパチンコして。そんなに漁師やりたかったら、いつまでもそのへんにいないで三陸とか行けばいいのにね」

保坂 「池辺さん」

池辺 「はい」

保坂 「次これ、カルテ、優くんだけど」

池辺 「はい。あ、そうですか？ 定期検診じゃないですよ？」

保坂 「うん……」

池辺 「どうしたんでしょう？」

保坂 「まあいいや。呼んで」

池辺 「はい」

(優を呼びに出て行く)

(戻ってくる)

(村瀬のもとに戻り、保坂に向かって)「今きます」

村瀬 「いわきにもともと住んでた人と、原発近くに住んでて被災していわきに移ってきた人との間で、なんかね。税金払わなくていいから、でもいわき市民はもちろん払ってその税金でみんな暮らしてて、その住民税がすごい高くってえ」

石田 「めちゃくちゃ仲悪い」

村瀬 「すごい仲悪い」

池辺 「て言いますよねー」

石田 「ふざけんなって感じで」

村瀬 「毎日、寿司屋に通ってねえー」

池辺 「ねー、すごいですよねー」
石田 「土地の買い占めとかも」
村瀬 「家建てられるくらいお金持ってるのに、ていうか家建ててるのに、仮設は仮設で持ってて」
池辺 「そうそうそうそう」
石田 「仮設に、電気つけるために行ってる」
池辺 「最悪ですよねー」

優 (診察室に入ってくる)
石田 「あ、じゃあもう僕はこのへんで。すみませんが、納品書はじゃあ次回というこ
とで」
村瀬 「はい。ご苦労様です、いつも」
石田 「ええ、じゃあ、失礼しまーす」
池辺 「どうもー」

保坂 「こんにちは」
優 「こんにちは」
保坂 「今日はどうしたの。何かあった？」
優 「いや、喉が、最近また変で……」
保坂 「痛い？」
優 「詰まってる、みたいな。つかつかって、声が切れちゃいます、たまに」
保坂 「喉に負荷がかかっている感じはある？」
優 「歌ってる時ですか？」
保坂 「でもいいし、友達とおしゃべりしてる時なんかでも」
優 「……ああ、たぶん、ちょっとだけ」
保坂 「茎突咽頭筋（けいとついでんとうきん）のストレッチは続けてる？」
優 (頷く)
保坂 「喉に負担がかかっている状態が長く続いて、筋肉の使い方やバランス感覚が戻りきっていないのかな」
優 「先生」
保坂 「あ、そうだ、最近暑いから、クーラーつけて寝てない？ 夜」
優 「それは俺、絶対にしないです。前の学校の顧問にめちゃくちゃ怒られてました、それやると。指揮棒、折るんです。おまえらなんか合唱部やめちまえ！ って」

保坂 「へえ。怖いね」
優 「……先生」
保坂 「ん」
優 「あの、触らないの？ 今日」
保坂 「……しようか？ 触診」
優 （頷く）

保坂 （優の喉に触れる）
「じゃ、まずは喉頭からね」
（優の甲状軟骨の両翼を親指と人差指でつまむように、指先をこまかくふるわせながらじっくり触る）
「次、顎（がく）の状態を見るね」
（優の顎のすぐ下を持つようにし、顎の線に沿って指をすべらせながら揉み込むように触る）
（耳の付け根の真下を押す）
「左を向いて」
（甲状軟骨の張り出しに指を這わせる）
「はい、じゃあ右」
（同様に）
「まっすぐ前を見て。少し上を向いて」
（顎の先端から甲状軟骨までぽんぽんと指先を押し付けるように触りながら下る）
（甲状軟骨の中心を軽くつまみながら）「前を向いて。声を出して。あーー」
優 「あーー」
保坂 「うん」
優 「……」
保坂 「続けて」
優 「あーー」
保坂 「はい。いいよ」
（机に向き直り、カルテに何やら書き込む）
「筋肉がまだ硬いね」
優 「声が切れるのはそのせい？」
保坂 「直接は関係ないけど、声帯を使うのに疲労しやすい状態ではあるよ。あと、ま

れなことだけど、切除痕を突発的に異物と認識して喉が萎縮する場合があつて。でもちゃんと慣れることだから、それは心配要らないよ」

優 「はい」

保坂 「今回もトローチくらいしか処方できないけど」

優 「大丈夫です」

保坂 「定期検診は定期検診で、来るかい？ 次の」

優 「はい、来ます」

保坂 「もし不安が残るようだったら、念のため医院長に診察してもらおう？ 彼は土曜の午前しか来ないけど、予約はできるから」

優 (首を左右にふる)

保坂 「そう？ 遠慮してるの？」

優 (首を左右にふる)

保坂 「わかったよ」

●優、雅のそれぞれの部屋（ふすまで隔てられている）

優 (ぼんやりしている)

優 (自分の喉を触りはじめる)

(触りながら何かを思い出すように目をつむる※以下、片手を喉に触れたまま)

(股間に手を伸ばす)

(ズボンのファスナーを開け、自分のものを直に触る)

(しごきながら、時おり苦しそうにうめく、あるいはため息をつく)

(背中をびくりと急激に丸め、やおら息をゆっくりと吐き、脱力して後ろに倒れ

る)

雅 (優の隣の部屋で、床に座り、ベースを構える)

(音を鳴らし、時どき弦を締めたり緩めたりする)

優 (音が聞こえた瞬間、びくっとして雅の部屋の方を見る)

(静かに起き上がり、ティッシュで手と股間を拭く)

(何度か雅の部屋のほうを見やり、やがて意を決したように)「雅？」

雅 「ん」

優 「こんな時間に調律してたら怒られるよ」
雅 (ベースから右手を離して)「誰のせいやおもてんの」
優 「は？」(雅の出方を伺うが、反応はない)
(立ち上がる)
雅 (立ち上がり、優の部屋に続くふすまに近づいて取っ手に手をかける)
優 (別のふすまを開けて廊下に出る)
雅 (それに気づき、すぐに廊下側のふすまを開け、部屋の前を通り過ぎようとする
優の手首をつかむ)
優 「えっ!？」
優／雅 (ふたり同時に)「なに」「優、」
優／雅 「うわ、え、なになに」「おまえさ、」
優／雅 (間)
雅 「おまえさ、ひとりでするとき、声出とるよ」
優 「……は、いや、なに、うそ」
雅 「声、我慢できひんやったら毛布かぶってやれ。母さん上がってきたらどないするん。いつもみたくネタなら良いけど、まじなの見られんのはきついやろ。俺が先に気づいてたらベース鳴らしてごまかすけど、毎回はむりやぞ」
優 (雅から目を背けて)
「わか、わかったから、離して」
雅 (語調を緩めて)「おまえ手え洗ったんか」
優 「まだ。拭いただけ」
雅 「うわっ」(慌てて優から手を離す)
優 (別の手で雅を叩く)「ついてないわい」
雅 「ははっ。まあ、フロ入れよ」(言いながら、ズボンの尻で手を拭う)
優 「ああ、うん。雅は」
雅 「とうに入った」
優 「あ、うそ、やばい」
雅 「うん。母さん怒る前に入れ」
優 「うん……」

●川上家ダイニングキッチン

優／雅 (食卓についている)

鞠子 (台所で支度をしている)
(テレビが点いている)

アナA 「……中通りにも、濃霧注意報。浜通りにも、濃霧注意報です。海上警報、三陸沖の全域に、海上濃霧警報。東部には加えて、海上風警報も出ています」

雅(*) (天気予報とかぶって喋り始める。天気予報のヴォリュームは、はっきりと聞こえるが人物の台詞が消えない程度)

アナA 「県内の今日の天気です。各地、晴れたり曇ったりの天気で、ところによっては、夕方から夜の始め頃、雨でしょう。

「……波の高さ、1メートル50センチの見込みです。各地の降水確率です。夕方六時にかけて、20%以下です。風の予報です。会津や中通りでは、西寄りや南寄りの風、浜通りでは、東寄りの風でしょう」

「今日の予想最高気温です。中通り、昨日より大幅に気温が上がるでしょう。会津若松 28 度、福島 32 度、郡山 28 度、いわき 27 度でしょう。天気の移り変わり、会津若松、昼過ぎにかけて晴れるでしょう。郡山、一日中よく晴れるでしょう。福島も、夕方に一部雨雲が出ますがおおむね晴れるでしょう。いわきもおおむね晴れるでしょう」

アナB 「7時になりました。おはようニッポンです」

「第 24 回参議院選挙が、きょう投票日を迎えました。午前 7 時から、全国およそ 4 万 8 千箇所の投票所で投票がはじまりました。今回の参議院選挙は、選挙区 73、比例代表 48 の、あわせて 121 の改選議席をめぐる争われ、389 人が立候補しています。投票は、昨日までに繰り上げ投票が行われた離島など、一部の地域を除いて、全国およそ 4 万 8 千箇所の投票所で、午前 7 時からはじまりました。そして、全体のおよそ 35%に当たる、およそ 1 万 7 千箇所の投票所で終了時間が繰り上げられるほかは、午後 8 時に締め切られ、即日開票されます」

「また選挙権が得られる年齢の 18 歳への引き下げや、隣接するふたつの選挙区をひとつにする、いわゆる「合区」が初めて導入されていて、こうした制度改正が選挙結果にどのように反映されるのかも注目されます。参議院選挙の投票日にあたって、各党は声明などを発表しました」

雅(*) (優に目配せして)「おまえきのうのおかずって何だったん」

鞠子 (台所から食卓に朝食を載せにやってくる)
「お高野の炊いたのでしょ。鶏のサラダも食べたじゃない」
(またすぐに台所へ戻る)

優 (鞠子に向かって)「いや、違うから」

雅 (朝食を食べながら)「別の話だから入ってこんで」

鞠子 「何よ、もう。男の子ふたりだと本当これなんだから」

雅 (優に向かって)「で？」

優 「いや、言わないし」

雅 「なんで」

優 「なんでって、なんで知りたいのそんなこと」

雅 「前おまえの部屋あさったけど何も出てこなかったもん。エロ本もエロビも、何も」

優 「は！？ なにしてんの！？」

鞠子 「なーに一、聞こえてるわよ！」

優 (鞠子に向かって)「母さん！ 雅が最低なんだけど！」

鞠子 「本当に！ 本当、下品なんだから。もう本当いやっ」

雅 「なに、妄想？」

優 「違うし」

雅 「女優？ アニメ？ 漫画？」

優 「最低」

雅 「もしかして好きな奴？」

優 「ちが……」

雅 「いるんだ」

優 「おい」

雅 「クラスの子？」

優 「違う」

雅 「部活の子？」

優 「それはない」

雅 「えー、別のクラス？ 別の学年？」

優 「ぜんぶ違う」

雅 「じゃあ誰」

優 「関係ないだろ」

雅 「え、なんで、誰」

優 「母さん！！ こいつしつこい！！」

鞠子 「優！ お兄ちゃんに向かってこいつって何なの！」

優 「なんだよそれ」

鞠子 (何やら切り刻んで容器の中に次々と放り込む)
「あ！！ 優、あなたきのう保坂先生のところに行ったんですって？ なんでよー、もう。次行くの来月になってからだったじゃない」

優 「いや……、いや別に痛くなったんだから行ったっていいだろ。俺の喉なんだから」

鞠子 「だからって、もう、なんで一言母さんに知らせなかったのよ。優くん来ましたけど普段の生活で困ってるようなことないですか？ なんて電話くださってびっくりしちゃったわよ、もう」

優 「え、先生から電話きたの！？」

鞠子 「ううん、いつもの看護師さんからよ、村瀬さん。ちょっと年配の」

優 「ああ……」

鞠子 (ハンドブレンダーをセットして容器の中身を攪拌する) = (アナウンサーの声が消える)

優／雅 (同時にテレビの画面を見、次いで鞠子のほうを見る)

鞠子 (ふたりの視線に気づき、怒る)
「何よ！ 聞こえないってのね？ でも飲むんでしょ、あんたたちのために作ってるんだからね、プロテインスムージー！！」

優 「まずいよ」

雅 「粉が残るもんな」

鞠子 (容器の中身をふたつのコップに分けて持ってくる)
「はい、一日一杯！ 飲んで早く学校行きなさい。優、今日は合唱あるの？」

優 「まあ」

鞠子 「雅はまっすぐ帰ってくるの？」

雅 「わからん」

鞠子 (台所に戻って容器に少し残ったスムージーを飲み干す)
「えー、もう、ちょっと、私きょう遅いんだから、優が帰ってくる頃には居てよお。部活の後おなかすかせてるんだから。ご飯、一緒に食べるのよ」

雅 「なんで？ 歌うたうだけと違うの？」

優 「はっ、合唱はほとんど運動部なんだよ、このド素人が！」

鞠子 「こら、なーに！」

●合唱部部室

(部員が二人一組になって腹筋をしている)

有希 「百、終わったら背筋、腹斜筋左右それぞれ百。終わったら休憩して全員揃ってから発声はじめまーす」

優 (文哉に足を押さえられながら腹筋をする)

「俺、今日パート練終わったら早退する。喉見てもらいに行くわ。部長に言っ
いて」

文哉 「わかった。また痛いのか？」

優 「痛くない。でも変」

文哉 「えっ、変？」

優 「なんか変……」

●保坂咽喉科クリニック診察室

保坂、村瀬、池辺がいる

優 (外からクリニックをじっと眺めている)

村瀬 「自分ちでもこう、放射線はかるやつすいやつ買ったのね。(ん)でもコレはだ
めだよ使えないよっていう製品の表の一番最初にくる、中国製のね、やつだったの」

池辺 「値段高騰しましたもんね線量計」

村瀬 「でもね放射線てね、自然に普通に100マイクロとかあったり」

池辺 「うーん」

村瀬 「飛行機とか、すごいあったりするし」

池辺 「言いますよねー」

村瀬 「ね、そういう日常に普通にあんだけど、福島だけがすごくなってなっちゃって」

池辺 「あれって今までわかんなかったけど、調べてみたら出ちゃったから」

村瀬 「もともと測ってなかったんだから、ベースラインがどのくらいでどれだけ増え
たのかなんて」

池辺 「わかんないですよねー」

●岡本家リビングダイニング

有希 (部屋に入ってくる)
(リビングのソファに鞆を置き、ローテーブルに置かれた冊子を見る)
(ダイニングチェアに座り、宿題をはじめ)

洋子 (リビングに入ってくる)「あら、帰ってたの」
(ローテーブルの冊子に気づく)

有希 (ローテーブルの冊子を見やる)

洋子 (表情がこわばる。冊子に手を伸ばし、数ページめくり)「有希！！」

有希 「はい」

洋子 「ちょっとこれ、あなたのなの？」

有希 「……ああ、うん」

洋子 「どういうこと、これは？ ちょっと、そこに座って。説明してちょうだい」

有希 (ゆっくりと立ち上がり、ソファに寄り、座る)
「説明って、なにを」

洋子 「だってこれ、あなた、これがどういう本かわかってるの？」

有希 「……お母さんこそ、わかっているの？ ぱらぱらとしかめくってなかったけど、内容ちゃんとわかったの？ もっとしっかり見れば？」

洋子 「いやあよ、こんなの。あなたどうして……、恥ずかしくはないの？」

有希 「恥ずかしいって何が？ これってそんなに恥ずかしいこと？ 人として間違っていること？ えっちなもの見るのがそんなに悪いこと？ お母さんだって私と郁実を産んだんだから、やることやったんでしょ？」

洋子 (絶句する)
「そんなこと……！ 今は、関係ないでしょう」

有希 「関係なくないよ。関係ないわけない」

洋子 「そんなことね、女の子が開き直って言うもんじゃありません」

有希 「なにそれ。どうして」

洋子 「どうしてって……、育ちが悪いと思われるわよ。すれっからしだって」

有希 「いつの時代の言葉、それ？」

洋子 「混ぜっ返すんじゃないの。とにかく女の子がね、こんなもの見て堂々としてるなんて、みっともないわよ」

有希 「なにそれ、気持ちわる……。女はうぶなほうが良いって？ そのほうが男に好

かれるから？」

洋子 「有希！」

郁実 (廊下に現れ、ふたりの様子を伺う)

有希 「日本の男がどんどん草食化してってるっていうのに、あんたたちがそんなロリコン文化をいつまでも押し付けるからこの国の少子化がぜんぜん止まらないんじゃないか！！」

洋子 「なんなの、その口の聞き方……」

「だいたい、あなた立派なこと言うけど、この本のは、その、普通じゃないじゃない」

有希 「普通じゃないって？」

洋子 「……同性同士、でしょう？」

有希 (一瞬、え、そうなの？ という顔をする)

「……そんなの別に珍しくも何ともないでしょ」

洋子 「中には、ちょっとはそういう人がいるかもしれないけど」

有希 「いっぱいいるよ、普通にいる」

洋子 「あのね、東京はそうかもしれないけど……！」

有希 「だ、か、ら！ なんでお母さんはそうやっていつも東京を別の世界みたいに言うの？ 東京に住んでる人たちだっておんなじ時代のおんなじ人間でしょ！」

洋子 「……」

有希 「ホントお母さんって差別ばかり。物分りの良いような顔して、でも自分の子どもにはああなってほしくないとかこうなってほしくないとか、けっきょくそういうことなんでしょ？ 汚いよ」

洋子 「……汚い？」

有希 「汚い」

有希 (冊子を取り、洋子を残してリビングを出る)

郁実 (有希に駆け寄り)「お姉ちゃん……！」

有希 「はいこれ、いくちゃんのなんでしょ？」

郁実 「うん」

有希 「没収されなくてよかったね」

郁実 「うん。ありがとう。ごめんねお姉ちゃん、すごい怒られてなかった？」

有希 「ぜんぜん平気。お母さん古い人間だから、たまにびっくりさせるくらいがちょうどいいんだよ」

郁実 「うん」
有希 (ふ、と軽く吹き出して)
「ねえ、さっき、なんか話の流れで、みんな同じ人間なんだよ！ とかかっこつ
けて言っちゃったんだけどさ、」
(郁実の抱える冊子を指して)「これ漫画の人だよな？ どっかで見たことある」
郁実 「うん。今コンビニとコラボしてる」
有希 「ああ、だからかあ。好きなんだ？ このキャラクター」
郁実 「うん。お姉ちゃんも読む？」
有希 「いや、私はいい」
郁実 「……」
有希 「あ、だって、よく知らないから、この漫画」
郁実 「あ、じゃあ、原作のほう貸す？」
有希 「あ、うん、原作なら。じゃあ貸して」
郁実 「うん」(自分の部屋に戻ろうとする)
有希 「いくちゃん」
郁実 (振り返る)
有希 「その本の人たちはさ、幸せなのかな？」
郁実 (冊子の表紙を眺めながら)「うーん。んー。私はハッピーエンドのパターンが
好き」
有希 「ああ、うん。パターンね……」(苦笑い)

●川上家ダイニングキッチン

雅 (台所に立って食事の支度をしている)

優 (帰宅する)
雅 (台所で、鍋の中をかき回しながら)「おかえり」
優 (鞆を床に放り、ダイニングテーブルに突っ伏す)
雅 「おかえり」
優 (突っ伏したまま)「んー」
雅 「めし」
優 (突っ伏したまま)「うん」
雅 「おい！」

優 (起き上がる)「はい！」
雅 「うがい手洗い」
優 「もー」
(席を立ち、洗面所でうがい手洗いをし、戻ってくる)

優 「めしなに」
雅 「ハッシュドビーフ」
優 「え、雅が作ったの!？」
雅 「いや、母さんの作り置き。あとこれあった」
(冷蔵庫を開け、取り出したものを優に見せる)

優 「ラジウム玉子じゃん」
(雅に近寄り)「あ、じゃあ俺ごはん別がいい。それかけないで、別の皿にして」

雅 「自分でやれ」
優 (冷蔵庫を覗き込み)「納豆も食べたいな」
雅 「食い合わせ考えれ」
優 「じゃあ雅オムレツ作って」
雅 「卵と卵か」
優 「こまかいな」

優／雅 (ふたりで食卓につく)

優 (食べながら、突然ため息をつく)
雅 (無反応)
優 「うーん」
雅 (無反応)
優 「あっ! いや、うーん……」
雅 「人に聞いてほしいことがある時はサクッと端的に言えて。話聞いてアピールがうざいわ、さっきから」
優 「あー、……かかりつけの医者には部活のコンクール見に来てもらうとあって、ありなんかな」
雅 「ああ? 忙しいやろ。普通に考えて」
優 「だよな」
鞠子 「ただいまー」

「あら、今ごはん食べてるの？」

優 「もう終わる」

雅 「母さん」

鞠子 「なに」

雅 「優が保坂先生に合唱見に来てほしいって」

優 「いやいいって」

鞠子 「あら、いいじゃない」

優 「え」

鞠子 「母さん先生に言っとくわよ」

優 「言っとくってなに。いいよ、迷惑だって」

鞠子 (食卓を見て)「あー！！ やだラジウム玉子食べちゃったのお？ せっかく新造おじさんにもらったのに」

雅 「あかんかった？」

鞠子 (冷蔵庫を開けて)

「明日の朝ごはんに使おうと思ってたのよお、もう一個しかない。もう私が食べる。あんたたちこれ食べたら承知しないわよ。私が明日トーストに載せるんだから」

雅 「あ、ええなあそれ」

優 「ねー母さん、先生に言わなくていいって」

鞠子 「なんでよ」

優 「いや、だって、迷惑だから」

鞠子 「だから早めに言っておけば迷惑なことないでしょう。日曜日は休院なんだし。あれ、日曜だったよね、次の、何？ 地区？ 県？」

優 「県。……やっぱいいよ。変だって」

鞠子 「何いってんの。福島来て先生のところにお世話になりだしたのって、あんたのポリープが一番ひどかった時期からじゃない。良い経過報告になるでしょうよ。ちっとも変じゃないわよ」

優 「あー、ええ？」

雅 「俺、フロ」

鞠子 「いってらっしゃい」

(優に向かって)「県、突破できそう？」

優 「県は大丈夫だろうけど、ブロックはたぶんムリ……郡山第二がいるから」

鞠子 「郡山？ なに、強いのか？」

優 「東北ブロックの中で最強。毎年、全国に行ってる。他にも仙台一中とか、湯沢

南とかもいるし」

鞠子 「ええ！ やだ私、知らなかったわそんなところあるの。えー、郡山？ ……優、あんたもしかしてそこ行きたかったの？」

優 「……」

●岡本家リビングダイニング

洋子 （ダイニングテーブルに着席している）

有希 （入ってくる）

有希／洋子 （しばらく無言）

洋子 「有希、この間あなたが言ってたこと……」

有希 「あれ、あれね、口からでまかせで言ったの。本当は別に目的があったから、いいの。普段からあんなこと考えてるわけじゃないよ」

洋子 「……」

有希 「でも、全然思ってもないことを言ったりはやっぱりしないと思う。ああいう状況で。だから、やっぱりあれが、基本的にはあれが私の考え方なんだって思ってくれてかまわないよ」

（キッチンで水をくみ、飲んで、出て行く）

郁実 （入ってくる）

「どしたの、お母さん」

洋子 「郁実。あなたのお姉ちゃんね、私、もう何がなんだか、わからないわよ、あの子のこと……」

郁実 「えー？」

（洋子の背中を撫でる）

●川上家リビング

鞠子 （電話をかけている）

「あ、もしもし、おはようございます、川上です。あ、川上優の母でございます。ええ、お世話になっております。あ、いえいえ先生はいいです、お忙しいでしょうから。ええ、それでその、優がですね、今の学校でも合唱を続けてるんですが、その県大会？ あ、

合唱は大会とは言わないのかな？ その、県のあれがですね、今度の月末にあるんです。ええ、もう、おかげさまで。……それでですね、うちの、優がですね、医院の人たちに見に来てもらいたいと言っておまして。いえ、その、保坂先生だけじゃなくて、村瀬さんもぜひ、お時間あれば……、いえ本当に、ご予約が他に何もなければ。

はい、ええ、もうすっかり。はい、毎日歌ってるみたいですよ。ねえー……。もう、ようやくです。本当にね、はじめてお見せしに言った時なんか、ね、喋るのもつらくて。ええ。ええ、だって、ええ、そうなんですよ、前のところがいくら強かったって言ってもね、鬼のように練習が厳しいとかそういうんじゃないかみたいなですし、そうだとすると、うちの子だけがってのもね、ええ。

……ええ、やっぱりそういうこともあったんじゃないかなって。はい……。いえ本人は顔には何も出さないですけど。何も言いませんし。ええ、だから、こっちへ来て、ね、療養というんじゃないですけど、ええ、ゆっくり、気持ちを落ち着けてくれればと思って。ええ。だから、あの、こんなお話、あれですけど、家の中が少しはゴタゴタしましたが、結局はこれで良かったんだろうなあ、って」

●合唱部部室

優、文哉がいる

優 (運動着を脱ぎ始める)

文哉 「それじゃあね」

優 「うん、おつかれ」

文哉 「また明日」(出て行く)

優 (シャツをはおり、ボタンを止め、ズボンを履き替える)

(『くちびるに歌を』を適当に口ずさむ)

有希 (優が制服のズボンを履いてベルトを締め始めたところで部室に入ってくる)

(優が口ずさんでいる歌に合わせて、自分のパート部分を歌う)

優 (有希に負けじと、本気で歌い始める)

優／有希 (歌をやめ、それぞれが何かを考えているようなそぶり)

(ふたりで廊下に出る)

有希 「リオンドールのとこまで一緒に帰っていい？」

優 「ああ、うん。……あ、」
有希 「ん？」
優 「部長、俺さ……、」
有希 「……」
優 「俺、好きな人がいる」
有希 (頷いて)「うん、知ってた。たぶん」
優 「ん。……それじゃ」(歩き出す)
有希 「明日も部活来る？」
優 (振り返って)「うん、行くよ」